

唐太日記・上

松浦, 武四郎 / 橋本, 玉蘭翁 / 鈴木, 茶溪

(出版者 / Publisher)

播磨屋勝五郎

(発行年 / Year)

1860

唐太日記

University of Oxford
Library

里程のふまゝに又さうさふにさうしき人の記述に陸奥の
邊を遊してさうめいさう故に後進悔惜の時より
遠也と云ひ置てゐるものなり他は同じくさうしき

とある申分をの意を島志臣等との両意下と認めて

此ふ事あるを及

はくさう案儀をさ申分の文書等のよりあつて陸奥
邊島より後せらさくニエニエタシといふ運上屋えさくニエ
シヤ類と云ふのは山程開闢といふ和人のまゝに申分さ
るるさう山中に踏破して東端なるナイフツといふ

出来より奥トツリの嶺を掃くマヌイといふるにとさう西端
越えよりさう又さうといふソウヤ乃後海境へ歸らさう海
の風を待たさう十余日の筆記中よりさう必要は採擇して
置れと彼等（此等の海所道よりさう舟よりさうするも
なまゝ）さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
余は後通ちて見さう後を以て江波の物さう柳園を
欠伸と勉めさう圖画をさう持て終えんといふものなり
仔細は圖をさう

松浦竹四郎源弘

あは四丁丁の欄内中をさうさうさうの橋をさうさうさう

[Faint handwritten text in cursive script, likely a transcription of the printed text on the opposite page.]

甲寅 唐太日記卷の上

多氣志郎 松浦弘 評注

嘉永甲寅六月余堀使君ヨリシケより後ひ蝦夷地の西浦を巡視してソウ

ヤ蝦夷地西海岸よりカカラカフ風待マツ

同十二日順風にて同所を出帆一唐太島カラトシマある志良努之シラヌシへ向て

颿ハトト

注志良努之は唐太島の南第一岬西よりノトロの崎の少西

岬あり後ろより山有是より一湾を廻りソウヤを去る

と十八里とのう極高凡四十六度余也シラヌシをシラウシの

誤言也。シラ、と岩のより、ウシと云ふと云ふ此地前一ツ
の礁あるの故に辨るる會所一棟其外蔵、夷家七軒甲寅
の頃迄ハ山靚人等爰は來りて交易をなせりなり

風西に轉りたれを區春許潭クニハコシへ向て颯々此夜ハ洋中にて夜
を明し翌

十三日未明より朝嵐ハ帆を曳きし遣るふ其湾中鯨魚潮を
噴上げて其眺めいふべくされ辰時前同所より着り

注區春許潭ハ當島第一の好港西人爰を指してアニソ港と
云運上屋えりて建物蔵より弁天社等美敷きなり其
北八丁はバゴドマリ南三十余丁ありポロアンドマリ等

何處も番屋蔵にあり大船何程くても前は滯碇はるふ宜し

此所ハ癸丑の秋魯夷來住せり地あり地名クニユンと浪無
靜ありと云コタンを所と云儀なり實は好港に依て辨けし

とのなり

村垣使君其餘僚属も亦皆同日ふ上岨たり是より先き渡り
越る人々一同會合して唐太東西巡視の事を謀る兼てハ堀

使君東浦村垣使君ハ西浦巡視の心組なりしは糧米人夫ありと
差支への事の出来て東西手分もあり難れを兩使君とも

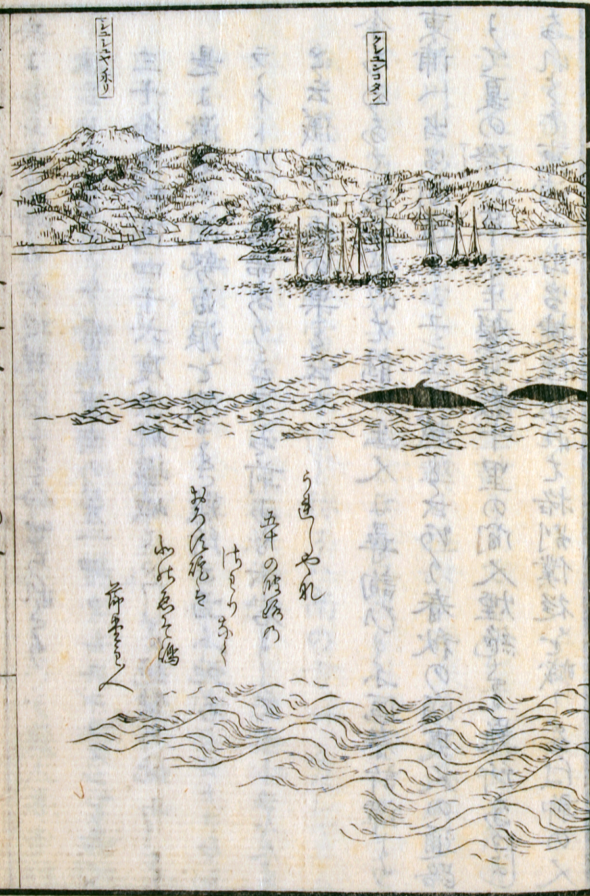
ふ西浦より巡視ありしとあり余ハ國思までも從ひあり

と下と兼而思ひたることもかく差支もあるありハ水野氏

正太夫



多氣志樓主人 圖



うきやれ
五年の修路の
はらけを
山はるを
前

共ニシレトコ岬の方巡視の事を命ぜられし

注シレトコサキを當島東南の第一岬クシユンコタンを去て
三十余里極高四十六度余峻嶒峨々として絶壁の地なり
是は激る潮勢白浪を瀕せ難所と唱ふ地名シレトコをシ
ライトコの結語ありシラと前も云岩としてイトコを足る
と云儀あり岩の果と云

余亦あかく思ひしれを能く土人は尋詢ひし區春許潭より
東浦へ出る間道はシユンユヤ越と云なり春秋の頃夷人の通路
して夏の際ハ草木生繁り数十里の間人煙絶る難所あり
あれども東浦へ出る捷徑あれを格別僕從を喊しあは聊の又

夫うて通路ありへきなり

注クシユンコタンより以北五里計してシユンユヤと云る所有
其川とちに入る少の陸を越日程六日あり東海岬ナイ
ブツは出る是とシユンユヤ越と云なり然る少クシユンコタンと
出て東奥は到る也當時本道と称する南の方ナシヤニと
云るに到り是より上ある沼は越此沼より陸路に少くを
過て又沼あり東浦トンナイナヤへ出夫よりヲナヨボカ
ウエンコタンリコヌシヘツリヲブツサキ半シユマヲコタンリイヌ
シナイ余ヲソエコン口レイニシユシユウシナイ十六シユマヤ
ナエブツと廻るあり其里程一倍は及ぶよりて夷人等步行

の時へ此レユシユヤ越の方と通るあり

余竊喜ひ此道を踰て国界に至んことを堀使君は請ひ申せし
は使君その意をよみて人吏の煩あるをさふ處置もあるは
如何なりて吾山越とて令せられし然る此日矢口備三郎
直養も余も亦く此間道を踰て国界に到らんとを村垣使君へ
建白したり其志暗合しとも亦奇と云へし此は兩人同行
して山越とてものよを松前の家来と談し支配人清水平
三郎へも談し兎角して人吏糧食の手當も出来され此行の
志は遂に決しぬ

十九日今朝へ朝陰る昼の頃より空晴風吹出せり朝四々時迄

る頃は區ク春許潭と覆せり

余後一人

名ハ

直養も同一人

名ハ

熊打是輕水牧惣太

松前家
家来

番人富

松豊吉嚮道者區春許潭の乙名イツボシグタゴエの小使サーブニ

アイノ等あり人足はハエ子アンベツエシマワセタボ、シラボクヨヲケ

ン、モンキワムツナ、ケトチン、エルシユトイ、カンユ、女夷はハエ

ケラサケンピリケス、ケタワヤ、ヤエランマ、シラエト、ヲコランヌ、シユ

コシユイケ、上下貳十四人あり此内糧米の減じらふ随中より

追々歸せり

三拾余町よりて雲羅此所より送りの人と袂を分てり此より

の番屋あり又去年より在留の魯西亞人の畑の試作せし所

あり三畝歩程も有之蘿蔔^{カブ}吧^{イモ}半^{イモ}あり作りてあり傍は番小屋
の跡あり瓦を製したる跡模^{カキ}型^{カキ}取^{カキ}散^{カキ}あり

注ウニラといふ地形後ろの方^ト盤^ト立^ト山^トあり其下は番屋一
棟あり其邊り地味肥沃あり故は魯人も畑地を墾し又其地
の土とりて瓦等を焼く跡有あり

夫よりウコカリウシ此所以前ハ夷家有り今ハなしウニエナ
稻荷の社夷家三軒あり五町余ありエントモヲ口同武軒あり五下
りてトマリランナイ同四軒あり八丁余あり子ナイボ此所は清水
平三郎の持小屋あり是より明朝の潮を待てニニエヤ川へ衆
入る船として未^レ日^レも晩^レまされとも一泊したる

注此子ナイボの地より西向より向濱ルウタカと對し一
灣をれしを奥ニエニエヤ川口より其沼内越而海淺し所て
寄洲ありて千浮るを船と容るる一俵此辺より湍潮
を待て容るあり

此所より平三郎持小屋ありふより寝食も安かりき此処の
前より五歩斗の畑有る^{タイコ}肥^{チサ}萬^{ニシ}紅^{シレン}蘿蔔^{ゴボウ}を^サ作^サり
る肥る越年番人^サ一^サの食料として水腫を病むる奇薬のより此
後ろは炭焼の小屋あり是等皆平三郎始て仕へたるより後
僕等前濱より鯉の四五寸斗あるを取来りて食を鯉夷語を力
バレイと云此夜ハ心よく打卧せり



注當所より奥シユシユヤ辺は産する鯨の味美なりと又そそく
産する他も穀多し冬月より此湾中一面は氷結り也山の
辺りの土人其氷上は大篝火と燈し穴を穿其火温の氣を集
り乘る魚を括搶して突ぬる羽の八龍湖より氷を割て網を
投し漁するより其魚一倍や少きなり又其肉味も龍の比
より勝るを美するなりなり

廿日朝曇りたまとも雨の氣色とも見え候今朝潮の満なり
して昨夜より夷船と前渡り也したるは朱明より支度より乗
船せり然るに此行ハ嶮惡の山路を越るなりと尋常の服装
にてハ此を通行成難きなりとあるは夷人の衣服アツシと云物を

昔ハ尾花帽子と云ものを被りキナホスといふる脚半を附けり
因て一絶を得たり

欲執孤筇窮嶮奇風餐雨卧亦何辭樹皮短褐芭花帽也好
人呼爲島夷

注此間道ハ道形もたゞ越え元の目的と山沓水脈等を取て
丈より高き草の中を分り谷地中ふと行とあるなり故
に終日下帷ハ露濡れぬ此装で行とあり其アツシと
いふハ木皮ツギにて織たものなり是より雷紋
振のものを木綿にて縫縫と土人の常服尾花帽子といふハ
芭花の穂をて作りしりのあるなり羽の最上辺より出又

キナホスといふ奥羽にて蒲脚半とて寒地ハ本郷にてハ
雪の中凍合してあゆむ難く又草深き所を越るハ一月も不
保故に多く此浦にて作りてを周り是ハ南部領の沼宮内
辺より出共上品なるハ馬の尾といふ作り雪の中越る山中ハ
ハ甚う涼しき所のなり

凡半里程乗出たる頃より空の氣色俄に変わり雨降り出たり
ツライホ^{地名}よりハ三丁余にてシユシユヤ^{地名}夷家八軒あり三拾一
余にてシユシユヤ川に入り口水深甚丈五六尺余川口午の二
中は尚なり

注シシユヤハ其地形後の方ハ鳳尾松の黒く粗なる

山續きシユシヤノホリといふ處に靠て前ハ少の岬を有し其
辺り蒲柳^{ヤナギ}原といふ水際ハ蘆荻多し其中は家居を築所と
此湾の第一奥の東岬にて波浪少しと有りシユシユヤ柳の
夷言その多きに由りて名せしや也是より土人等歩行の爲
ハ川口の手前字メナシサといふ處にて海を歩行するなり
夫より山に入て字ナタエとあるなりなり船にて行ふハ一里も
沖を乗りて此川は岬棹に入り此川ハ湾中第一の奥の
方にて洪水の節押出せし土砂多く処には洲と有りて船
動を難しとて難航なる所なり

川は流れて四五丁程の左の方榎林の内は鷺の雛の梢より落

たると驚て飛廻るを見附たり番人豊吉船より飛下り續いて
夷人共走り廻り終り捕りたり是を西使君へ献じしとて
水野氏へ書を添て歸り船の便なきたり此辺鴨の子雀の如
くあるの鳥群る水上を行き歸りて路より川より半道停
りて枝川へ入るより船を棄て上陸せり此所字チタへ地名と云由
木挽小屋あり雨より強く降出され此雲の小屋は泊せ
と議を去りても無て山越の日を積りて食糧と携へしは
何程の峻急なりとも雨は降りしきく滞留ありきうて志を
遂へるもあらずと兎を角もして前途をすまんと決定して
歩を進めぬ

和人々白米夷人々玄米とて九十日程の食糧を負載したる
余ハ船よりトンナイナヤよりナエブツの方へ回し積りて船
一の令も引續いて出たりたるなり風潮は障へられ
ぬ也東浦と出る月終は此船来りたり

注此船廻りの事の前者いひる如くチベシヤニより沼越トン
ナイナヤへ引出し東海岬をナエブツへ搔送り行事あり
此辺より兩岬とも概般夷人の木の林なり女羅敷木の長さとの
懸りて地は垂なり内陸地へ絶て見を唐函の山水の如く
なり一絶を賦して其木の皮を削りたるを置

松掛女羅千尺長素絲翠蓋滿山香平生愛翫唯圖畫始識

人間有此疆

此道樹枝交加して眼を遮り頭を障へ枯木朽根路を塞ぎ脚を
暑るを又雨ハ落くと降り困苦ゆゑをわづらひ辛うして二里
ほくもすみき少く小高き所より上り弁岳を登りしや爰をメ、
地名と云小流ありて水清冷蚊の多きと云言語は絶なり火を焚
ハ少くハ殊はあつあつ夫をを売里半程して字アライ地名と云
此所少く小高深林の中へ小屋掛たり小屋掛と云ハ水の
宜しき所を擬て小高き湿地ありと云と見えたりありあ惡
き水ハ腹痛の患あり湿地に卧すと耐ハ瘡氣を打きて病を得且
虫の類多しして難養するあり扱小屋掛と云ハ水より立

本ハ枯木の丸をわきし是して屋根柱と云ハ其上を椽の木
の皮より葺あり夷人とも事馴たまハ携ふる鐵してその皮を
剥きして手早きことのみなり

注此山道中誰りても通行の時小屋を架とも必も椽の立
本の皮を上下長四尺斗に鐵目を入置て剥き是して葺く後
三四人の宿と云ハ小屋家根と云ハ其皮凡そ十枚三十枚
を用也其皮を葺くの本より必も一枚あるて剥き候と云其剥
取一本ハ枯朽と云のあり候て其時ハ小屋掛たりと云所の
跡を余通行の時節見たり凡そ一所毎二百本余ありと云略
たり是等のありても此地樹木の多きことを知らん

小屋の前より枯木を集めて終夜火を焚き急率に掛り小屋
を焚き雨降出さず漏りて堪へくも雨とて止まり油紙を
引掛て虎角にて夜を明ぬ

廿一日昨夜より雨降り續きたり九時頃よりアライ^地とて半

丁程よりアライ川より此川水清冷なり爰より漱きぬ夫より

山道前日の如き掘地夷松の中より九里程よりコイ^地と云地

より深草の中より小屋掛あり是より入て朝飯の掘り飯を食と

注此地一つの沼あり其沼周より九里半是より落るをコイへッ

と云水清冷なりより門より出入る通行の節多し此所より宿

をかり余より通行の時も此處より小屋ありより爰より爰より

来ることを得たりサツコイと云るより露宿ぬシユシユヤ

と云る是より雪路なりは早着と云ふれども夏道ハ中々

暑し難し

番々富松樹皮を剥て此所と好く通ひせしむと記し其より

より門より余乃其本より漫書したる

草露鞭來山露新手排芽塞分荆榛風流官吏過斯地開闢

以來唯二人

此辺より左右草生茂り虎^{イヌ}扶^{イヌ}は似て夷言ハソソと云まて数冬

夷言をコロク二つの一圍余あるの路を塞き先は夷人ハ見ると

能はる其上泥濘より深き所ハ膝を浸るを里厚より小川あり

渡り深林を分行くは向より来るものあり東浦ヲタサンといふ
所よりクシユニコタン勤番の松前家士一同僚より来る書状の
飛脚あり此夷人の語は先立の間宮等へ積贈る米船をヲタサン
洋にて傾覆し其米を失ひたり故に来る飛脚ありと此米も
我々糧に關係するもの各是よりして心を傷めたり爰して
飛脚より別書畫食して歩を前あたると路を猶忌むる人の
草簍を以て水葵の如くして草の大ききあるを以て積舌と云
款冬といふ多くていふ大あり

款冬如竹鬱叢生葉々相重翠影清山路不妨多雨露一莖
代傘蔽頭行



注世間款冬の大なるものと秋田款冬と号て好事の人共葉を
摺り大さ藤紙は半一又風籙家より是を筆し此は此地の物
ハ是は倍して若藤葉は摺り付ハ全紙は満ハく是ともの
比せ馬來合羽とも云ふ

晝休せし所より武里余うてライ^{地名}と云る茂林は小憩を此辺立

木の中程を凡うて扱きたるやうなる跡あり依て是を土人ハ
向うハ羅鯨の雪中途は迷はるるを言ふありと又是より武里余
行てハセ^{地名}と云所は夷人ともか通行の爲は掛置より小屋り
止宿と

注此所をハセと誌されし實ハ此処ハアセクシといへる地

ありハセと此所より行て先生嗽をきし川をハンケナクと
いふ其川の向ふとし越而此辺の土人往來とも此所の
川の此方ハ彼方は是北宿すといふありといふ余も此川の
向うに宿すと記

此小屋ハ左右ハ雨覆あり中より火を焚き今宵直養余は
云糧食給せは念を遂に次目を俵せて進みんとすれども
女子の人まも接りたるは意を以て依りて某先を避けて糧
食の手當をすし行来ハ跡より搬運せんを余は托せ
とわり乃其意は任せて余ハ一日路も後進してはくんとし
評余未だ直養は邂逅せし歟といふ此所は讀みりて其意を

感一拍手して一笑を此深叢中數日の難程極歎の凶磨と
志く惚いさ地あり小直養強て前をたぐ其意敢て糧食
の爲のさああさあし此辺り足は泥濘は没し面部は何
やうな装とも忙懺の爲は責くつ小同行の爲は即ち取
て路をの取さる時は何とも難余もクシユコタシ
武人と同行のより隊長より言聞されさるゝ人の遠足を
前を行く一月前より只土人の道を運んで出立たり
つても其處さへ遠足して種々の奇語もあり他日土人
若より聞ゆつてもおのり

多くして紙帳の破きより入瘴氣肌を侵して眠るはき重なり

廿二日朝の雨は曇り昼より晴なり直養ハ朝疾く起き從僕
五人番人富松等ハ嚮道者イツホンク其外人夫五人を引連糧
米其外必用のものも持せて余より先は發せり余ハ少く後追
て出たり山道廿町余も過てハセハツ水清く浅く流る此
川より歌々

注先生此川ハセは有よりめてハセハツと云ふれり
此山中ハセハツと云ふものなり山人此川を指しハセハ
ケナイと云ふなりハセハツと云ふことナイン則て

此所ハ上の沢と云儀々余ハ此川の上にて宿ぬ

又拾四五丁にて同一川の上にあるサアブニアイノ余を脊負
て渡せり夫より一里計りて字イナヲカルシと云る処より
出ル此所木幣多く立て山霊をまつり

注此所本名ナハホイナヲカルウシと云あまハ柳の大木を
其傍に往來の土人^{エナラ}削花を建て拜をり行とあり其謂ハ
昔此島は鍋の臺なり以タコイは住る焼く土を以て始て
縄を作り東浦の土人との製を教へ夫よりして南濱より西
浦の土人とも教へんと鍋を脊負此所より越えりて風を過
て破りたりとまより意の達せざるを患ひて此処にて病

係り終り死せりと云り其跡を今神は祭り置き此辺りの土
人往來の時として削花^{エナラ}をまつて数日の途中の食糧を獲
て越えんとを祈り誓ふと云や此其土端を此島にて用ひ
し水は昔々の弁事話の物と思ひ居り今度^{コト}は
産堀君出浦の初よりエナナイとて有る圖せぬと端
をき校中より浮り出せりとて同所の土人献やせりて
持帰りありと見侍り余も始て土端を用ひ昔儀
を信ぬ

又き重余よりエナシユヤの川より出ル此処をヲロコトイと云
此辺りぬりて道ハ少あなれども草生るる所深く歎きぬ

徑七寸余

深サ三寸五六分

手作リ厚サ

九三四分ヨリ

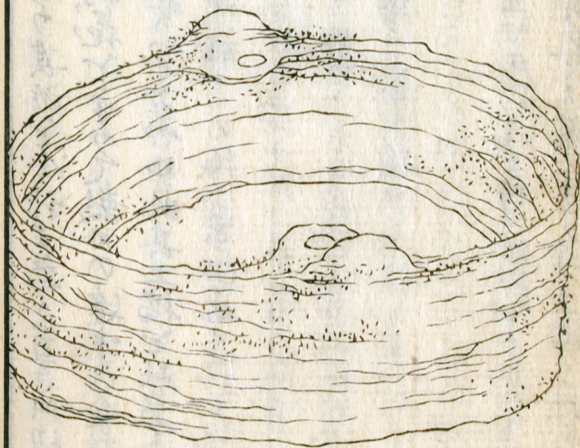
土分モ有缺ナリ

土至テアラタ

砂マヤリナリ

牙氣志郎

縮写



太くはくはの多きこり言格はゆるりまより同一振るる深蓋
中と分てき重半程初てきこシユシユヤ川の端は出る

注此地ハヤベンケヲロコトイと云ふ人し始めハわ川端ハ
ハンケヲロコトイと云下のヲロコトイと云儀あり此辺は款
冬原あり余爰は肉徒容と數十重垣よりクシユンコタン
の小使ツクニウと云ハ頗物を多（居る者あり）の故は是を
と云ハ何と云ふものと云ハ次彼より百連なるロレイの土人ア
カラカイ人（名）ハ是ハ夷言エバーと云テ東海岸の土人ハ
撲傷抗傷金創等ハ是を搗碎きて附るハ其切驗著と
依て考ふる是ハ南濱より西は去り東海岸より多きと云也

その形像日光山誌まゝ本林圖譜より出され、畧しぬ
主人等夫婦此所は小屋を作り居る名をスグロクと云ふを
モトヒニと云其傍は小川あり字モツケイと云ふ其出入り
何の爲に來り住するや聞は轉の漢と云ふ又食料も用ゐるアキラ
コロと云ふ此の根を採るは來り居るをあり依て石連する出
人等は直に煮て振舞ふ

注アキラニコロは東西蝦夷地にての名にて此地是とハ一と
云則黑卷丹の王なりは餘ニヨカイと云ふのあり是車卷丹
のとりなりトマと云て延胡索の根をも食用と云延胡索
ハ藥爲りて通名にヒツチリと云漢名を滴金卵と云生薬

本林圖譜より出され、畧し次はハ一ニヨカイの二種と出、直
とのなり

夫より小流を踰る何事も櫛木橋あり半里程してやうく深林
の中は夷人の掛る小屋あり此所をエクルケ地と云此林を出て
廣き道ありや蝦夷松の根多くて草の生高くす白き
總揚枝根の多き草多くて景色宜き地あり

注按は是等にあはる蘭草の一種ありや雜木繁茂枝
葉落ては腐き喬木倒してハ朽ちるの地なり梅雨の以
前此ものを生て余も此地よりて數十種のものを見ぬ
イナウシ地名と云此原野を暫く過て又山道は入り或里余して



深林の中小高き所へ小松掛く夜を明かり今宵は直養も在
らぬいゝわひいゝちれ也

辛苦嘗來雨又風寧堪獨臥亂山中別君最是傷心處今夜
司沐唯草蟲

又

斜架危檐了木支潺湲先辨與茶宜泥鞋探嶮穿山骨禿筆
題詩白樹皮雲濕半牀無客伴草埋荒徑有熊窺怪禽夜叫
長松上獨寢幽奇就睡遲

注テウシエナヲウシの徒語なり此地東西の境目よりて今
水の地あり依て往來の出入東より西多とのハ割花を所より

東の方の山霊は暇乞し西より来る者ハ西の神は暇乞して道
中の安を祈るあり依て多く此所は立ちし故に辨るウニ
多しといふ儀なり

廿三日朝曇り其時小屋を出て山林を暫く行つ二ヨロト少^{名地}
さる沼の端は出て夫より廣き野地なり此地萱^{カキ}竹^{タケ}等乱生を聞
は藁^{ワラ}藁^{ワラ}多く咲交りせる地にて四方を聞け少くは瘴氣を散
れり此處も坂の多きこの糠と掘^{ウツ}るのめり一りあるにそへ
り夫より又落虎杖多く生えりたる所を分け行つは前行の
人ハサイも見るぬなり其藪の大きな根の所にてハ七ハ寸も
廻りへ一と生え余りて子モイ^{名地}と云ふ處へ出る此所川あり巾鉄

間斗来り山道又野地を過てタコエ^{名地}の川上カモイチウといふ所
にて昼飯をまじく深藪の中は若^{クサ}走りあるを分てケナシ^{名地}
到着又此所も小川あり其傍は夷小屋を朝あれとも人ハあり又
同じ四五丁よりく巾四五間の川は大きな柳の樹の傍よりく
橋あるとあり枝ハ半天もぬき出て澤畔草叢とてむき
是を越て野地山林を過てホクイチヤン^{名地}といふ所にて休息あり
禪願光峯入の畫巻物より彼大江山より童子岩^{童子岩}の
まじり大なる溪河を枯木を倒して越るはあり先生
おそく人を其心おとて城ありあひりあつんとて爰より少
て竊笑ぬ



源氏物語
卷之四

三



源氏物語

卷之四

三

いそぎ
あやうき
丸末付

わんざも
あのをんや
あゝぬ
藤乃

夫より拾丁余うてフルシチヤン^{地名}漢小居武軒あり又拾四五丁
初てトノシチヤン^{地名}此辺は夷家多しありて七歳斗と四歳斗の
小兒或人並居をり此夷家ハ我ハ付来き人足ホニキツ^{人名}夫妻
の家あり妻をシユシイケ^{人名}といひ家ハ老人或人ありと云此
小兒をホニキツ^{人名}とあると魚のホニキツ^{人名}此子を愛ふ様し
置クシユコタン^{地名}夫婦を移して居る此處の人まは
當れらるあり今日ハ己の家ハ立寄るなりはく止宿して
来るに違ふりき此處より行く同通を初と凡三千丁余う
て郷導サアブニアイノ^{人名}の家ハ暑せりサアブニハ當時家内九
人等のようにあると春屋斗りとも阿は立寄合世帯のよう

小居ハ四間ハ二間半もなりし燭を二切てあり其一段高き
所ハキナ^{人名}を發て余ハ坐を設けり余サアブニハ寶物と
見せると乞ふれを一奉様^{シユ}なりと初より延々手の中ハ
赤錆の太刀の身と其鞘と出きり然るに刀此錆とるが
もや鞘は入り又其外ハ銀箔と貼るる當陣刀の身相の板
あり作るを見せり余ハ力くと賞しけきハサアブニも其
賞せりと何思ひや答り次はまゝカマスの内より女の古
着と出りて見せり是ハ彼情れ意の生^{ナマケ}色をて裾摸振
の紋附あり是を折疊せりいふるハあき唯かき次の内ハ押入
たきは揉み皺をとりて諦る今宵ハ山中と違ひ安心して

るる御姫

注此処平地より東の方のタユイノホリより落る河と南ニヨ
ロマイの方へ落る川と合して是より五里斗と下りナイ
フツ川として落合々あり人家九軒ありてサアブニと此所
の小使役たるもの故に家も相應は大きくて余も此家とて
止宿せりありて是時竈をたいてはやきり一本掃子にて
櫛の上へ棄り煙かきとて坊うに中より古着を授け
太き刀の身を奉と鞘とを出し見せしめけりて是より
老てる母賴は巴の紋と云ふ程彫きし其鞘は出人より
の細うと云ふや揮いて処々を巻む極雅味あり

り



表顔とてその有り扱を傍の柱と見たり文字振のどの
有る故は是を問ふ矢口ニシハのカンセと答へる見たり
如何にも手垢して思ふあり終は讀むことを好むるも
送恨ありける

拙る余是より何処へもせよ落書するのみとのりて生年
祇附あるを徒る事と忘むの情是く依て余は落書は云
ふを以て生年は祇附するにありし此度の行処と山
中にて誠目等と見て夫を目的と心未だなるに有
己外ハ我も休む所ハ必は何處とも志す一箇のまゝとれ
しむゆり依て心ゆく人を傳へる其人は住はるれハ龍洞と

を以て人々を遊ばし人見ひたり何故英雄其像優なりと
も當馬は世に多く落書誠目も堂社の柱に生年の白壁振
はと角ありしことをより傳へるかや山中より見たり
一應の直も金とて是を以て

廿四日晴よりサーブニの宅を出て前の川を渡りてやう
深草の内へ入るく款冬との金のもの果してより生衣
て惡きものにかゝるトウシトウ^{名地}の服と通り山より降
地とて小川ありウロウと云所あり爰して鳥雀の鳥
は追ひまゝと捕へく深草の内へ移ちやうより夫より^{名地}
中を穿りてシアン子ヤ^{名地}と云ふ此所夷家二軒エフンハ^{名地}

云々の家は休む此多の直参も休む。ゆゑなり此の家のお
 二般英船を備へたり依て是より川中或は開余も有
 趣。是タコエの川下あり兩岸垂柳して屈曲し拾丁余
 までオシ子ナイ地名と云川は落合是より幅廣くあるなり
 住此処余を通りしより一里あり余をタコイより山道き
 里半計りありへん子カルウ地名と云るの処より三里余も
 下り此にアンチヤのエフレハの家にて休む夫より廿丁余も
 ちくナエフツへ下るあり此ナイフツ川は西北より落合より
 此川の本川より是より上より人家或は村もあるなり
 是より河中七拾間あり及び其原より四尋より六尋

位も乃ふ當島トツリ以南の第一の巨川にて水勢も

多なり

キ、ニウシ地名アフコタン地名ビラホ地名ありと過て三里程してホロスウ

川岸は荒く然るに此所は女夷を人停宿て声と掛りり般

夷船或は艘より余舟中のサーブ人名と物語りてやがて

乗来り船と交りて乗替より此処より雨頻く降出し

寒く堪ふ其形状と云ふなりや女夷新の爐を手持

り是より大鐵板の物ありこれを火程も有へり板は置き

て火を煖めたり程なり薪を火にても板は火燃へる煖なり

此処尤右の水より水釣めく首を出し船を窺ふなり此川

岸は兎の居るを乞ふにサーブニは問は是をヲリケ工兎の
東言し
つり夫より更なるき里余してナエブツの岸より青竹中を
行き妻家より暑に通辭の豊吉と跡船して後進より無き
糧米の心の心はかき余柳が是へより夫倍より運上屋
チツアマ、アンナと問は夷人等首をふりてインヤムと
船米有
つゝ爰より大は望と失ひ如何と案々然無ひきより雨ハ
中より強く寒きに堪へざるは煙は焚火とて身を暖め
濡る衣類と乾くものありて聞て跡船より暑て夷倍も困し
直養の書する書状と取出しに漸く事情もわたりたり先々
直養の心構へは賜なり武彦の来は是迄の間宮未持のなり

余等この為はシユンコタナよりおどろき来へ未へ未へ看せと先迄の
為は跡より賜る米船は昨日此地と過てオタサレ地名と云所より
行過るよりあるは此船と引留て糧食の乏しきありし
とて直養とオタサ地名とて走り行くふよりなりか
故は我等も同行の糧食の乏しきと云と十分は暑なり

評先生十方は暑なりと云目眩は見るの如し

今由米ハ漸くハ殊あり去来も亦幾ありなれは豊吉や覺
志く是より武里斗りも南あるシユンコウナリと云所より去来
を斗入加満と取寄より是めて皆力を用て此夜より去来
を食とてと議して齋たる焼酎をとりて飲みて

お郎より其家の主人の名をワーチヤアイノと云ふ
注此処は東海岸より一萬里の波濤國に隣るものなり此河は
壯地第一の大流沢目数十里開くも源をルウタカノホリより
来る其川口の南畔に家居をナイブツと沢の入口との儀
に憩而水心憶氣を會てて惡く或捨所を上り壯岸一
の沼あり九廻り或里もあり其廻り皆根木之系海岸より
五髭松の長きより或丈位のもの林となりたう秋より来
此廻り鶴居を林を渡り水の多きなり此所音の噪り
きき水家の内より對岸に物語するも聲と妨多し
て聞とり難き所なりと云や

唐
九
言

卷
之
上

七

